

心理学 ミュージアム



高雄医学大学心理学系（台湾） 副教授
櫻井正二郎

Profile — さくらい しょうじろう
Institute of Information Science Academia Sinica (Taiwan) 助手を経て現職。高雄医学大学図書館館長，高雄医学大学コンピュータセンター長，高雄医学大学心理学系主任。専門は知覚心理学，両眼視，心理学史。著書は『視覚與認知』（共著，遠流出版社）など。

台北帝国心理学研究室の先生方とその業績

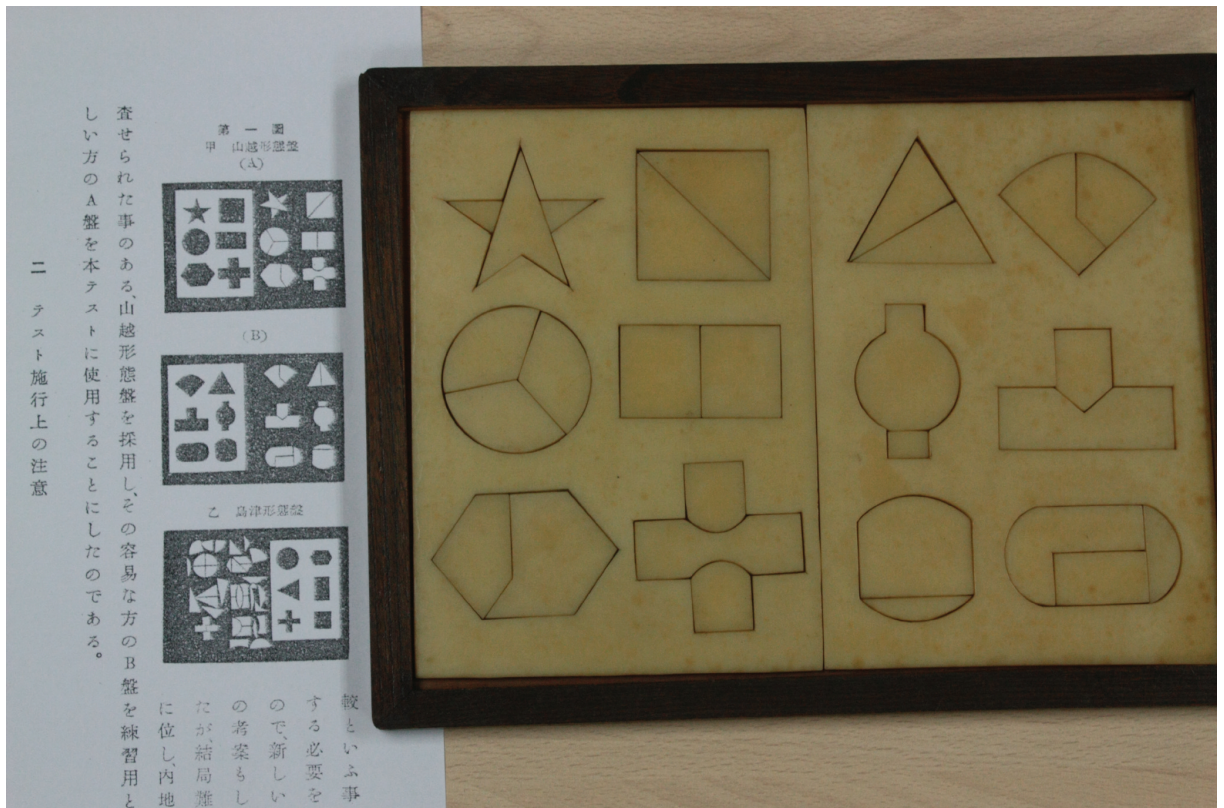


写真 1937年の飯沼の論文の1ページと，論文の研究に使用されたと推測される形態盤
(出典は，飯沼龍遠（1937）『臺北帝國大學哲學科研究年報』第4輯，343-420.)

1928年、台北帝国大学設立と同時に心理学研究室が設けられた当時、帝国大学は講座制で、心理学研究室は文政学部哲学科心理学講座にありました。設立時は、教授に飯沼龍遠氏、助教授に力丸慈圓^{りきまる じえん}氏が就任されました。両氏とも東京帝国大学で松本亦太郎教授に師事し、台北帝国大学への赴任も松本教授の選任といわれています。その他、助手として、同じく東京帝国大学出身の藤澤^{ふじさわ}祐氏が就任しています。

この心理学研究室は、スタッフ3名に対し、1945年終戦までの17年間、今までの調査の結果、多く見積もっても5人しか専攻生がいませんでした。60号で紹介しましたように、設立当時の台湾は治安も安定し、インフラ建設も整ってきていたところでした。また、設立趣旨にあるように、日本国の南方発展のために研究を担うことを目的としていました。結果として、台北帝国大学心理学研究室の先生方は、研究と、台湾での心理学の啓蒙に励んでおられたことが見受けられます。

台北帝国大学心理学研究室の先生方の主な学術的研究発表は、『心理學研究』『心理學論文集』『臺北帝國大學哲學科研究年報』などに寄稿されています。特に、『臺北帝國大學哲學科研究年報』は、心理学研究室が所属していた哲学科の学術出版物で、1934年より終戦まで9回発行され、心理学研究室の先生方は、連名または単独で9本の論文を寄稿しました。この雑誌に掲載されている論文には、台北帝国大学の当時の研究の方向性がみられます。写真は『臺北帝國大學哲學科研究年報』1937年第4輯に掲載された飯沼の論文と、この論文の研究に使用されたと推測される「形態盤」です。論文の題名は「形態盤成績の民族的相違」、内容は被験者を、内地（日本）から移住してきた日本人（内地人）、漢民族（本島人）、台湾の先住民とに分け、形態盤成績を比較したもので、結果は、日本人と漢民族はほぼ同じで、先住民は少し劣っていたとのこと。飯沼は、この差を民族間の差異と見立てていました。また、『臺北帝國大學哲學科研究年報』1939年第6輯に掲載された藤澤の論文では、デンボーの花の取り方の実験（Dembo, 1931）を用いて「人種心理学」のニッポンと高砂族の領域の相接した境界現象を見出そうとしました。藤澤は部落間の行動の差異は、ニッポンと未開の民族との間の境界現象だと考えました。そして続く実験2で、ロールシャッハ・テストを使用して、潜在意識からそれを考査し、境界現象は民族間の差異に由来するものだと結論づけました。

このように、台北帝国大学心理学研究室の先生方の研究は、先住民関連に重点を置いていたことがわかります。もともと、大学設立の要旨に沿うような研究重視がされるのは自然なことであり、また設立直前にドイツに滞在した飯沼が、ヴェントの「民族心理学」の影響を受けたのも容易に想像できることです。ただ、このように研究発表が先住民に偏るのは、1930年11月に勃発した「霧社事件」（霧社セデック族マヘボ社の頭目モーナ・ルダオを中心とした6つの社（村）の男が、霧社公学校の運動会を襲撃し、女子供関係なく日本人だけを殺害した事件。その後、先住民に対して日本軍による報復的殺害も行われた）の影響を無視することはできません（巫, 2007）。霧社事件が起こるまでは、台湾総督府は警察官を先住民の部落に駐在させ、武力と威圧で抑えこむ方法を使ったようです（周, 2009）。それまでは、このような政策でそれなりの成果をあげていたようですが、霧社事件の発生で見直しを迫られたのは当然のことです。特に心理学者は、心理学の見地から、先住民の心理と精神状態解明を求められたのだと思われます。

心理学研究室は、第60号で紹介したように、1933年に防音室、温湿度調節実験室、暗室などを備え付けた建物が完成し、主にドイツから輸入された大型の実験心理学機器が整備されました。これらの実験機器と、現在台湾の国立台湾大学心理学系に保存されている機器との関係は、次号で紹介します。

文 献

周婉窈 (2009) 『臺灣歴史圖說 増訂本』 (中国語) 聯經出版公司

Dembo, T (1931) Der Arger als dynamisches Problem. *Psychologische Forschung*, 15, 1-44.

藤澤祐 (1939) 高砂族の行動特性 (その一): パイワンとルカイ. 『臺北帝國大學哲學科研究年報』 第6輯, 310-429.

飯沼龍遠 (1937) 形態盤成績の民族的相違. 『臺北帝國大學哲學科研究年報』 第4輯, 343-420.

巫毓荃 (2007) 消失的憤怒: 日治晚期藤澤祐の原住民心理學實驗. 『中文電子期刊新史學』 18卷, 103-155.